



# 日本ラテンアメリカ学会 会 報



2020年8月31日

No. 132

## 1. 理事会報告

○第164回理事会

○第165回理事会

新理事長のあいさつ

## 2. 定期大会の中止と

第41回総会報告

## 3. 研究部会について

## 4. 第一回優秀論文賞受賞者の ことば

## 5. 第42回定期大会開催の案内

## 6. 『ラテンアメリカ研究年報』 第41号の原稿募集

## 7. 新刊書紹介

## 8. 事務局から

集状況について報告があった。第40号には論文1本、第40回定期大会記念講演、第40回定期大会シンポジウム「ラテンアメリカ研究—地域性と学際性を架橋する経験から導かれるもの」の記録が掲載される予定である。7月下旬に発刊し、会員への送付可能となる見込みである。

また、査読結果に関して投稿者から問い合わせがあったため、編集委員会の方針を文書で回答した。この件を含め、査読制度の再点検を次期理事会の年報担当理事に申し送りしたいとの報告があった。

## 3. 地域研究部会の開催中止

各担当理事より、3月から4月にかけて予定されていた三地域の研究部会は、いずれも、新型コロナウイルスの感染拡大への予防措置として、開催が中止となったことが報告された。なお、西日本研究部会ではZoomによるオンライン対応も検討された。

## 4. 会計

子安理事より、2019年度の会計決算書および監査報告書の説明があった。2020年度の予算については、収入が3,525,000円、支出が5,960,000円となる見込みである。

## 5. 会費請求の見合わせ措置

新木理事長より、新型コロナウイルスの感染拡大による事務手続きの困難から、当面、2020年度年会費の請求を見合わせることにについてメール審議

## 1. 理事会報告

○第164回理事会議事録

日 時：2020年6月7日（日）～

6月14日（日）

承認日：2020年6月14日（日）

形 式：メール会議

### 〈報告事項〉

#### 1. 『会報』第131号の刊行と第132号の編集状況

受田理事より、『会報』第131号が3月31日付けで発行されたことと第132号の編集状況について報告があった。

#### 2. 『年報』第40号の編集状況

鈴木理事より、『年報』第40号の編

エドゥアルド・ガレアーノ（久野量一訳）  
『日々の子どもたち あるいは366篇の世界史』（岩波書店、2019年、290頁）  
（紹介者：郷澤圭介 東京外国語大学）

本書は人類の愚かさと勇敢さ、そして美しさにまつわるストーリーを日めくりカレンダー形式で紹介した異色の短篇集である。訳者がつけた副題が示す通り、一年366日に相当する366篇の物語が、記念日もしくは歴史的事件が起こった日に関連付けられて展開する。過去から見れば子どもである我々人間が、歴史の集積である日一日から教訓、哲学、世の中の誤りを学び、それらについて思いを致す機会を読者に与えてくれる。

著者ガレアーノについては読者諸氏もよくご存知であろう。1973年、母国ウルグアイで起きた軍事クーデターのさなかに投獄され、その後アルゼンチン、スペインへの亡命を余儀なくされた。そのような経歴に裏打ちされた洞察力で、ラテンアメリカ人として目の当たりにしてきた不正、不平等、抑圧を告発してきた。本書では、繰り返される人間の蛮行に対する憤りを短篇集という形で表現している。

1月1日から始まり12月31日で終わる各篇は、世界中から著者が収集、引用した有名無名の興味深い事件、エピソード、詩で構成されている。日付やその順序にはさほどの重要性はなく、国際記念日や著名人の誕生日、逝去した日から連想が飛躍する場合もある。テーマは多岐に渡るが、その根底を流れるのは軍事独裁、帝国主義、資本主義、宗教、人種差別、女性蔑視などによって引き起こされてきた非人間的な振る舞いを憎む思い、そしてそれらに反発し抵抗してきた勇敢な「弱者」への賛美である。誰が、いつ、どこで、どうやって殺したのか答えられないから公表されなかったアルゼンチン軍事独裁政権下で消された数千人の「行方不明者」リスト、外国からの征服を拒み尊厳と土地を守ろうとする先住民を、野蛮、無知、自分たちと違うという理由で罪人、テロリストとして虐殺する国々、信仰心を守るため多くの人々を拷問にかけ火刑送りにした宗教、「不完全な男」

「法律的に人でない」とされてきた女性たちが各分野で成し遂げた数々の歴史的偉業などを、3行程度から1ページで紹介する。一方で、教育・芸術活動の重要性も強調し、それらが禁止、弾圧されてきた歴史にも触れている。

本書の意義深い点は、第一に全体を通して人間の本質を鋭く描写していることである。それは「わたしたち一人一人が天国と地獄の両方を内に持っている」という言葉に端的に表れている。虐げられた人々を救おうとする心と、自己の欲望のために他を支配または排除しようとする心。いずれも備わっているはずの我々が、与えられた役割や立場によって態度を変えることを本書の歴史挿話が証明する。人は騙されるのが好きであり、悪いことは他人（他人種、他民族、異性）のせいにするという習性も各エピソードから顕わになる。

第二に、矛盾に満ちた世の中において価値観、常識に疑問を持つことの大切さを強調していることである。「真に教えることとは疑うことを教えること」と述べたベネズエラの「狂人」シモン・ロドリゲスは、考える自由がない社会に盲従する危険性を説いた。「自由」や「正義」は誰のためなのか。「文明人」と「野蛮人」の一体どちらが美德の持ち主なのか。罰を受けている人が本当に罪を犯した人なのか。マヤの宇宙観や宗教を否定しキリスト教を押しつけたことを2009年に謝罪したユカタンの修道士たちの例のように、我々に一筋の希望の光を与えてくれる物語も描かれている。

「言葉の泥棒」を自負する著者が選んだ珠玉の言葉の数々は、いかなる世界史の教科書よりも心に響く。通常通り1月1日から読み始める必要はない。今日の日付の一篇、もしくは偶然開いた頁の内容に思考を巡らせるのもよいだろう。ラテンアメリカ文学愛好家だけでなく、日常に疑問を抱くすべての人々に一読を勧めたい。